2024.11.22　　第 37 回日本高齢者大会 in あいち 第 4 分科会

高齢者と短歌－暮らしの中から短歌を、短歌を希望のエネルギーに－

【短歌講座】　「老いの短歌」の歩み－万葉集から現代短歌まで－

津田道明（新日本歌人協会）

「老」という字は、中国最古である甲骨文字の解字によれば、人が腰を曲げて杖をついていている様子を表していると言われています。人の体に起こる経年変化に対応した状態を表す文字が、前 16 世紀の殷の時代に成立したわけですから、歴史時代の中で、初めから老いの問題は人間の関心事の一つであったことがわかります。

わが国ででも古代の律令国家時代の中で、21 歳から 60 歳までの正規の租税負担者（丁）に対し、61 歳から 65 歳までを老丁として、正丁の二分の一の税負担とし、66 歳以上を耆（き）として税を免除しています（奈良時代半ばに老丁は一歳繰り上げられる）。このように、古代律令社会には明らかに社会的政治的に〝老い〟ということについての認識がありました。こうした歴史をふまえ、日本人はいかに〝老い〟について自覚し、考えて来たかを古典から現代にいたるまでの短歌作品を通して見ていきましょう。

Ⅰ.万葉集から近世和歌まで

1　**悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごとみせましものを**　　大伴憶良　万葉集巻 5　797
2　**妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに**　　同　798

大伴旅人が 728 年（神亀 5 年）、64 歳の折、大宰帥として任地にあって妻を亡くした時、筑前国司の山上憶良が、旅人に奉ったもの。漢詩文とともに、「日本挽歌」―日本文による長歌及び反歌五首からなる挽歌を贈ったものです。

旅人が六十歳を超えてからの、必ずしも本意ではなかった大宰帥としての赴任中に、老妻を亡くしたわけです。位階ともに旅人がいわば上位にあたりますが、この歌を読んだ印象では、そうした身分の差を越えた、歌人としての独自の人間的なつながりが生まれているような印象があります。「筑紫歌壇」と呼ばれるように、旅人、憶良を中心とした歌の交流は、都のそれとはまた異なった風土、環境があったことを思わせます。

山上憶良の歌は、通説では四期とされる万葉集の時期区分では、人麻呂に代表される第二期に続き、平城京遷都 710 年から 730 年代の半ばとされる第三期を代表するものです。第三期は平城京の遷都に始まり、律令国家の形成、定着の事業の展開という歴史環境がありました。この中で、遣唐使の一員として中国で学んだ影響もあるでしょうが、万葉集には憶良の漢詩文も遺されています。

前歌の「国内」は、「あおによし」という枕詞がありますから、奈良をさしているでしょう。故郷をことごとく見せられなかったことが、まことに悔やしいことだ、と詠っています。

二首目、「楝」は梅檀のことで、初夏に花をつけますが、花期としては長い。その花が散ってしまっても、私の哀しみははれることがなく、泣いていることだ、悲しくてたまらない、という意味です。

このように、舒明―持統天皇気期に活躍した柿本人麻呂以降に、平城京遷都、律令国家建設の時代に、山上憶良が登場し、恋愛や自然を歌わず、生老病死や家族の問題を主題として歌ったことに、私たちは注目したいと思います。

3 **青柳のほつ枝攀ぢ取り蘰くは君がやどにし千年寿くとぞ**　大伴家持　万葉集巻 19　4289

橘諸兄の長寿を予祝したもの。柳の青い枝を蘰にして飾るのは長寿の礼装の一つです。この歌は天平勝宝五年（753 年）二月の歌ですが、前年には東大寺の大仏開眼があり、開眼供養を終えた聖武天皇がそのまま藤原仲麻呂の私邸に還幸したことは、橘諸兄を中心とした勢力に対し、藤原仲麻呂を中心とした勢力が朝廷に相当、再進出していたことを表しています。

橘諸兄への祝歌のあとに続いて、万葉集巻19の最後に、家持の絶唱と言われる「春愁三首」が載せられていることも確認しておきたいと思います。諸兄は天平勝宝 8 年に致仕し、その翌年一月に七十四歳で亡くなります。その半年後には、子の奈良麻呂が仲麻呂打倒の計画が露見したことにより、大伴古麻呂などとともに処刑されます。

4 **老いらくの来むと知りせば門さしてなして答へて遭はざらましを**　読み人しらず　古今和歌集

初句は「老ゆ」の名詞形の転じたもので「老ゆらく」がもとの形。老いることです。老が来ること、老いることが判っていたら、門を閉じて「いません」と答えて、「老い」に出会わないようにしたもの。「老い」を擬人化した、忍び寄る老いへの嗜虐の歌です。

5 **年ふれば我が黒髪も白河のみづはぐむまで老いにけるかな**　檜垣媼　後撰和歌集

作者は若い頃、雅の人として名高かったのですが、艶やかな黒髪も白くなり、「みづはぐむ」（瑞歯ぐむ）、老いてから歯が生えるとして、すっかり年を取ってしまった、と詠っています。

6 **年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山**　西行　新古今和歌集　巻 17
7 **風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬわが思ひかな**　西行　同

七十三歳で没した西行が、僧重源の依頼により、東大寺再建の勧進のため、奥州藤原氏のもとを訪ねたのが（『吾妻鏡』による）69 歳の時です。当時としては超高齢でした。小夜の中山は東海道、静岡県掛川と島田にある峠の難所です。西行は 40 年前、二十代で陸奥、出羽をまわっていますが、この旅の時も小夜の中山を通っていたのです。今回の勧進は、鎌倉の源頼朝との緊張関係にあった平泉の藤原氏を訪ねる旅でしたから、40年前の歌枕の旅とは全く性格が異なります。この不安感が次の富士の歌にも現れています。

重源の依頼とはいえ、交流のあった平家による南都焼亡という大事件への贖罪のような意識もあったと言われています。東大寺再建のため、重源という民間僧を起用したことも、東大寺創建に関わった行基の果たした役割を考えての起用でしょうから、西行の旅もまたこうした歴史の重要な意味を持っていました。

8 **君ぞなほ今日より後もかぞふべき九かへりの十のゆくすへ**　建礼門院右京大夫集　357

9　**言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそ　とめまほしけれ**　　同　360

前歌は藤原俊成の九十の賀に下賜された法衣に歌の刺繍を命じられた作者の建礼門院右京大夫は、賀の宴の翌日、俊成に贈った祝いの歌です。「九かへり」は九回。「九かへりの十」は九十。今日から、更にこの後九十年も生きられることと存じます、と詠っています。

朝廷の、天皇の周囲の中に長命の人が現れるに及んで、七十の賀などが営まれるようになり、「喜寿の祝い」などもこの時期に始まったようです。

その建礼門院右京大夫ですが、その職名は安徳天皇の生母の建礼門院徳子に仕えていた時の名です。俊成九十の賀の時は、後鳥羽院の元に再出仕していましたから、既に新しい名を持っていたはずですが、定家が新勅撰集の撰をした時、作者名を再出仕した新しい名か、それとも昔の「建礼門院右京大夫」のどちらか、と尋ねた時、彼女は忘れ難い昔の名として、「建礼門院右京大夫」に、と答えたのです。時代を生きる自覚でしょう。

10　**後世を願やれ爺様や婆様　年寄来いとの鳥が鳴く**　『山家鳥虫歌-近世諸国民謡集-』和泉
11　**親は子というて尋ねもするが　親を尋ねる子は稀な**　　同　但馬
12　**金も威光の横柄顔も　昨日限りの三途川**　　同　伯耆

一首目は、後世ー来世の生まれ変わりの歌です。後半にある通り、鳥が、今生から来世を願ってこちらに来い、と呼びかけているというのです。

万葉集の動物を歌った歌の中で、鳥の歌は圧倒的に多く、とくに鳥は特別な関心を集めていました。ヤマトタケルが死後、白鳥となって飛び去ったことなどもその一つでしょう。

鳥の歌でも最も歌われたのが霍公鳥です。百人一首にもホトトギスの歌があります。

『山家鳥虫歌』は江戸時代、明和年間に編まれたもので、七七七五調を基調とする民謡調の歌を国別に編んだもの。労働、暮らし、愛恋など庶民の実感が詠われています。二、三首目のような諷刺歌もあります。三首目は金権政治家の末路を物語っているようです。

13　**この里に手まりつきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし**
『良寛歌集』(日本古典全書)　164
14　**霞立つ長き春日を子供らと手まりつきつつこの日暮しつ**　　同　168

越後柏崎の僧、良寛の歌です。文化 13 年(1816 年)頃には、老いのため、国上山五合庵から、山麓の乙子神社境内に居を移したとされます。前歌には「くがみの宮にて」と詞書きがあります。

六十歳の初めのころの歌と思われますが、万葉調の歌風は、脱俗至純の人柄と相まって、子どもらと無心に遊ぶのは、大乗的悟達の現れとも言われています。歌とともに、書においてもその精神が遺憾なく表現されていると評価されています。

七十代に、四十歳下の貞心尼との贈答歌にも慈愛が感じられます。良寛のほか、近世末期に、橘曙覧(福井)や、大隈言道(福岡)などが出て新しい短歌表現の道が模索され、短歌革新の内部的な変革の道が切り拓かれていったことは、明治維新による、欧米文学の流入という国際的な契機とともに、重視されなければなりません。

Ⅱ. 近、現代の短歌

【老いの自覚】

15　**六十七歳の老いのよろこびを誰に告げむ剱岳の上にけふ岩を踏む**　　松村英一『雲の座』
16　**駅の階段踏みはづし手すりにすがりたり慌てるなかれまだ七十代**　　岩田正『和韻』
17　**八十を過ぎていまだも熟せざるおのれほとほと施無畏に遠き**　　坪野哲久『人間旦暮』

一首目、松村英一の北アルプス、剱岳の歌です。松村の師の窪田空穂も、1913 年（大正 2 年）に槍ケ岳に登っています。日本の登山史の黎明期で、おそらく歌人の中では最も早かったでしょう。松村英一の年齢からすれば、剱岳に登ったのは 1956 年か。この年に生れた人の平均寿命が 63.60 年余ですから、当時としては超高齢の登山でした。

二首目の歌は、1924 年生まれの作者が 2000 年に刊行した歌集に入っています。よくあることと楽観できません。踏み外しの逆に、階段でつまづくこともありますから。

三首目、坪野哲久は明治 39 年（1906 年）生まれ。昭和 62 年（1987 年）１月 1 日から 12 月 31 日まで、日々の暮らしの歌を作り続け、１２００首を上下二巻に分けて編んだ歌集です。歌は、八十代に入った作者の境涯詠ですが、自分は老いてなお成熟せず、けっして穏やかな存在ではない、と歌っています。無畏は畏れることがないということですし、施無畏とは、無畏を施すということです。仏が衆生の恐れや不安を取り去って救うことを意味しますが、八十を過ぎて、それにはほとほと遠い、と詠っています。

これは自己否定というよりは、むしろ衆生の一人としての自分の生きかたの肯定の歌と私は読みたい、と思います。

18　**足の爪摘むが大儀となりてきぬ腰が曲がらぬ足があがらぬ**　　吉野昌夫『ひつそりとありし』
19　**九十三の手足はかう重いものなのか思はざりき労わらざりき過ぎぬ**　　土屋文明『青南後集』

老いの体の身体的な表現の歌です。前項の松村英一、岩田正の 60 代、70 代の歌と比べると肉体的な衰えが率直に、リアルに詠われています。吉野昌夫は学徒出陣の経験もしています。この歌は、88 歳の時の歌か。高齢女性でも、足の爪を切るために前かがみができなくて、ネールサロンにゆく、という人も増えているようです。

土屋文明は明治 23 年（1890 年）生まれ。平成 2 年（1990 年）に、享年 100 歳と長生しました。筋力が衰え、日常の動作にも不如意を感じるようになっています。こうした衰えはまったく思っても見なかったことで、自分の体を労わるということもなかった、と書いています。

【老いの風景】

20　**いつの間に時のすぎたる手も足も我をはなれし如き日続きて**　　土屋文明『青南後集以後』

土屋文明の第 13 歌集で、遺歌集となりました。文明は、思うに任せなくなる手足を、「我を離れしごとき」と歌っています。前の⑲から、さらに老いの進んだ状況を詠っています。自分をはなれて-自分のの思うように動かない手足になっていて、そんな日が子の床リオ続いている、と嘆いています。

21 **路地にゐる犬を怯れて進み得ぬまで年老いて衰へにけり**　佐藤佐太郎『星宿』

1980 年代の初めの歌ですが、野犬ではなく、飼い犬かとも思いますが、繋がれているのでしょうが、作者には怯えがあります。若い時とはずいぶん違った感覚ですが、作者にはこうした身辺の感覚の変化を微妙に歌う力があります。

22 **命一つ身にとどまりて天地(あめつち)のひろくさびしき中にし息す**　窪田空穂『丘陵地』

空穂は 89 歳で没しました。『丘陵地』は空穂が八十歳の歌集です。この歌の「さびしさ」は、啄木や牧水のそれとはかなり異なります。現実社会と自然のさびしい中に、ひとり息する自分を見つめています。歌集のあとがきに「資質乏しく生まれた身ではあるが、向上したいという念だけは保ちつづけて、それを生きがいとしてきた」と書いてますが、それは亡くなるまで変わりませんでした。

23 **イブ・モンタンの枯葉愛して三十年妻を愛して三十五年**　岩田正『郷心譜』
24 **二本足三本となりその一本玄関の笠置きにたてかけておく**　岩田正『柿生坂』

『郷心譜』は岩田の短歌への復帰を宣言した歌集で、平成 4 年（1992 年）刊。岩田正の妻は歌人の馬場あき子。二人が結婚したのは 1952 年です。岩田正のこだわりを感じるのが上句です。「枯葉」は第二次大戦後に作られたシャンソンですが、最初に歌ったのがイヴ・モンタン。ところが、なかなか売れず、ヒットしたのはジュリエット・グレコがカバーし、さらにアメリカで「Autumn　Leaves」として売り出され、さらにジャズにアレンジされるなどして世界的にヒットしたのです。それでも岩田は、イヴ・モンタンだという。
二首目は、杖を突くようになった岩田正の生活詠。外出時には手放せなく立っていた三本目の、杖という足を詠っています。

25 **死の側より照明(てら)せばことにかがやきてひたくれなゐの生ならずやも**　斎藤史『ひたくれなゐ』
26 **おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやうにゆかぬなり生は**　同
27 **ぐじやぐじやのおじやなんどを朝餉とし何で残生が美しからう**　同『秋天瑠璃』

齋藤史は佐佐木信綱の下で作歌を始め、長野に疎開し、生活し、この地で没しました。麻痺の夫と失明し、認知症を発症した母の介護を通じ、人間の生涯を厳しく歌っています。二人の「一級障害者を抱えながら」（歌集あとがき）生活を切り盛りし、結社の主宰者として活動し、作歌を続けることの困難は想像するに余りありますが、これらの歌には、ただ感情に流されない理知的な、あるいは科学的な思考さえ感じられます。暗く、湿りがちな〝老い〟について、それを打ち払うような強さの源泉ともいえます。

28 **人間に楽しき晩年などなけんその晩年にわれはなりをり**　佐藤志満　『雨水』
29 **夫痩せて三十九キロその身体支ふれど重し夫の骨格**　宮　英子『花まゐらせむ』

前者は佐藤佐太郎の妻、志満の歌。結社「歩道」を支えましたが、前歌は、先に見た斎藤史の世界に通じています。とくに、夫亡き後の空漠感は否定しようもありません。

続く宮英子も、病弱の夫、歌人宮柊二を支えて奮闘し、柊二没後も結社にあって後進を育てました。日本人の男性の場合、70～74 歳ではおよそ 60～６７キロの間に４割以上の人が属すると言われていますから、39キロいうのは痩身言ってよいのですが、それでもよりかられると、高齢女性では支えるのが困難です。その実感が詠われています。

30 **ゆるくゆるく過ぐる病院の一日よ忘れいし生命の速度と思う**　高安国世『光の春』

「塔」を創始した歌人。70歳で亡くなりますが、一年前の入院時の歌。この時高安は胃癌の手術を受けましたが、一年後の 1984 年他の臓器への転移により、急逝します。第二歌集巻頭歌が「かきくらし雪降りしきり降りしずみ我は真実を生きたかりけり」という歌です。この歌集は、高安のもっとも初期の歌を集めていますから、実質的には第一歌集にあたります。医科に進むか文学の道に進むか、という深刻な分岐点にあって、周囲の声にあらがって、京大文学部に進むのですが、以来、京大に「塔短歌会」を創立し、現代歌人集会なども組織します。土屋文明の指導を受けて、さらに自分自身の歌風を作り上げるために、リルケ研究者としての実績を生み出しながら、力を尽くしました。自らの刻苦の人生の述懐のような歌です。

31 **少年老いやすく今に老い老いてなお辞書と首っ引き夜の更けるまで**
加藤克己『夕やまざくら』

卒寿を記念した第 19 歌集から。94 歳で亡くなったが、最後まで作歌意欲は衰えず、その気息が伝わってくるような歌です。作風の振幅が大きかったということですが、伝統と革新、写実と抽象といった対抗軸のなかで、自分というものを創り、壊し、また作り直す作家精神に富んだ人でした。
忘れ難い一首を引きます。「核弾頭五万個秘めて藍色の天空に浮くわれらが地球」(昭和 62 年)

32 **コラテラル・ダメージなどと済ますのか例へば広島長崎のことも**　清水房雄『汲々不汲吟』
33 **百年はめでたしめでたし我にありては生きて汚き百年なりき**　土屋文明『青南後集以後』
34 **咳を殺して歩む靖國神社前あなたはもう殺すもの無し**　塚本邦雄『汨羅変』
35 **二〇粍機銃の銃身洗ひゐし中学生に迷ひなかりき**　島田修二『行路』

一首目、コラテラル・ダメージは軍事用語。二次被害を意味する。米国による無差別殺人への抗議の歌。米国の戦争終結の論理への批判です。
二首目は先に紹介した文明の最終歌集から引きました。100 年を生きた歌人の、痛切な告白で、日本と自分の 100 年の歩みを歌っています。一首目の歌と重ねるならば、アジア太平洋戦争を美化する、いわゆる歴史修正主義への内的批判の歌でしょう。
三首目の「あなた」とは、いったい誰だろうか？
四首目、作者は 1945 年海軍兵学校に入校し、敗戦を迎えます。この歌は 60 代半ばの第九歌集にあります。兵学校は 16 歳から。優秀な生徒は中学 4 年生から、一年繰り上げで卒業でき、旧制高校や兵学校に入学出来ました。この歌は海軍兵学校入学以前の、中学校における学徒動員時の回顧でしょう。1945 年 3 月以降、中学校、国民学校高等科の授業は中止になっていました。

36 **徘徊老人を人工衛星に監視しゆくを「進歩」といふ**　小池　光『静物』

携帯電話を使い、位置情報を確認できるのだという。いったい人間の繋がりはどこにいったか、と思わざるを得ません。「住みにくい世のなかさらに住みにくく」と歎息せざるを得ません。

Ⅲ. 九十歳代の短歌好者の歌

最後に、「新本歌人」誌の 2023 年 9 月号の特集「高齢を生きる-90 代の歌ー」にふれます。
この特集には、一人三首、21 人の 63 首が寄せられたが、そのうち、各一首を紹介します。
小題は筆者が区分したものです。お名前の後の数字は発表当時の作者の年齢です。

【老いの身体のいま】

37　水銀柱体温計にじわっと昇りつつ柱時計は日の境界の音ながく打つ　碓田のぼる(95)
38　しょぼしょぼの目をおさえつつ綴りいる「母の歴史」に己が足跡　小原喜代子(91)
39　脳からの指令は来れど手も足も思うがままに動いてくれぬ我九十歳と七カ月　相馬里子(91)
40　手摺から手すりつたいて階段を上がって下りるおりるは難儀　長谷川とく代(93)
41　青信号またたきはじめ気は急くが腰の痛みに歩幅は伸びず　深野一郎(90)

【老いの述懐】

44　六十四年共に生き来し妻のいのち八十九歳今日も家事すべて老ゆ　小原俊幸(92)
45　労弁の肩書つけて終えるまで六〇余年は一筋の道　小林つとむ(90)
46　長寿なりし母夫へ作りたる食事独りでもと立つわが家のキッチン　炭谷素子(95)
47　痛む足水面にふんわり浮かばせてプール遊泳楽しきリハビリ　武野フミエ(93)
48　戦死せし父の齢(よわい)を三倍生き卒寿祝わる子や孫・曾孫(ひこ)ら(93)　鈴木　広(90)

【老いてなお前を】

49　独り居のわれ貪欲な九十歳短歌も詠みたい絵も描きたい　有吉節子(90)
50　歌友(とも)ありて九十四歳生かさるる歌会書道絵手紙の日日　乾千恵子(94)
51　九〇代に突入し経験多しと思えども未知のことばかりでこれからが人生　田中良(90)
52 なすべきこと、やりたき事の多々ありて　老いを自覚せぬ間に九十六歳(きゅうじゅうろく)を越えたり
寺島萬里子(96)
53　綿 T シャツもシャキッとたたみ重ねゆく明日も爽やかにわが生きるため　中村美智子(93)

【老いて戦争を語り継ぐ】

54　脚絆巻き軍帽被り真四角の背嚢背負っての通学なりき(県立工業高校)　小暮　功(91)
53　半分も義務教育を受けてなし戦争はすべて破壊する　長崎モリエ(92)
54　空爆をのがれて過ごした校庭に桜の咲ける夜を忘れず　松村　(93)
55　焼け残りの知り合いに濡れし服着替えよと男子の服をあてがわれし　山下正子(93)
56　十六で硫黄島に戦死の旧友よ 9 条とともに余は生きている　渡辺幹夫(95)

以上